
Your memory 無機と有機の狭間で

水素

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

YOur memory 無機と有機の狭間で

【NZコード】

N16520

【作者名】

水素

【あらすじ】

西暦 20XX

世界的情報化社会へと突入した地球。

自然環境を考えない急速な社会変動は世界規模での大災害を生み出していた。

巨大台風、大地震、津波、殺人、バスジャック、ネットハック、テ

ロリズム

数多の悲劇が身に降り懸かる時、脳内に無機質な声が響く。

…キミハ ナニヲノゾムカ？

数多の試練を乗り越えた先に少年が見る物とは……

Episode 0 Prologue

2015年

人類は奇病に悩まされていた。

その病気の名は…鳥獣脳症

ある日を境に記憶が衰え初め、最終的に鳥の様に成り果てる病気である

最初は痴呆の一種とされ軽視されてきたが年度を重ねる度に患者数は増えていき、三年後には世界人口の約三割の人間がこの奇病に侵されており、「鳥人間」などと言つ单語が飛び交うようになった。

この事実に頭を抱える各国の首脳陣は科学の精銳を集めた研究チームを作りこの奇病の解決を担つた。

だがどの国も原因は解明できず患者を増やす一方だった…

何も進展が無いまま数年が過ぎ、「鳥人間」の数は世界人口の半数にまで渡つた。

一向に収まらない奇病を前に終始諦めムードを漂わせる人々に一つの吉報が走る。

日本の研究チームに属する生物学者が奇病の原因を突き止めたのだ。

人々は喜び世界は歡喜に満ち溢れた。

だがそれは長続きしなかつた…

この生物学者が言つ奇病とは、ある細菌が脳の一部である「海馬」に感染する」とこより記憶処理が全く出来なくなつてしまつ。

それを聞いた首脳陣はすぐさま滅菌処理をするよつ命じた。

その結果患者数は年々減つていき人々に平穏が戻ってきた…かに思えたが。

人間の思考はまたも虚しく崩れ去るのだった…

数年前 バイオハザードの細菌汚染において各国の首脳は新型の抗生物質にて感染を抑えられたかのように思われた…

だがそれは新たなるシフトへの足掛かりにしかならない事を知らずに…

薬剤耐性を手に入れた細菌は再び地球上に蔓延し一度目のパンデミックを引き起^こし人類を恐怖に引きずり落とした。

ある都市ではこのパンデミックに対し一つの計画が実行されよつとしていた…

：人体の一部にメモリーチップを埋め込み、記憶の保全とチップ内部から発するレ波による細菌の消滅

これを期に人類は奇病から解放される事となる

：数人の実験体の命と引き換えに。

西暦 20XXX年

奇病が収まつてから数年…

『I Program』はその役目を変え今だ世界中に存在していた。

これまでの医療機器という認識は一転、今では新手の「コンピューター」として世間に認知されていた。

これを期にネット業界が大幅に成長し世界規模での情報化社会へと突入した。

ここ日本も例外無く情報化社会へと着々と歩みを進めていた。

午前 4時

ほとんどの国民が眠りの余韻に浸つていて、一本の電車が走つていた。

明け方にも拘わらずも客席の半数が埋まつていて、光景は異様の一言が相応しいだらう。何故ならば…

その埋まつている席に座つてゐる者がすべて学生だからだらう。

世界規模での『I Program』発展に便乗し新しく建てられた附属高校の一つだ。

工業科と理数科しか無く高校では珍しい理系専門校である。

名目上は私立だが、実質「高専」よりも入るのが難しいとされ、必然的に「がり勉」や「エリート」が生徒に多く見られるが、何時何年も例外はあるものだ…

この集団の中一人の少年は眠り「ケ」でいる。

はたうるさい宣伝広告も今の彼には子守唄程度にしか聞こえられないだろう…

「スウー…スウー…」

小気味良く寝息をたてる彼が見る夢は、莘々と希望が不幸取り巻く絶望か…

夢、それはとても曖昧な物である

Episode 1 『I Program』

存在している物が無かつたり…逆に存在自体無い物が現れていたり自分から見れば幸福なのに対し、他人から見ると不幸だと言つ

数多の矛盾が織り成すこの世界を夢の一言で片付けるのか、一種の世界と受け取るかそれによつて今後の世界が変わつていくだらう…

「う…ううあ…良く寝…は?」

俺は気が付くとよく分からぬ所に居た。先程まで乗つっていた電車は何処に…いや、電車には乗つっている座席の位置、出口の方向、すべて同じだ。

ただ…

「…何で…逆さま?」

ある一点を除けば。

表裏が反転した世界。

それは何処か神秘的で、やけに静まり返つていた。
まるでそこに何もいなかの様に…

「なにがどうなつて ん?夢か?」

周囲を確認するよつに立ち上がりその体勢のまま出口と思われる方

向に歩を出す。

「…確かに夢ならつじつめ合ひつてだよな。やけに静かな所とか「ガ
ンツー」…」

考えながら歩いていたため、足元の何かに躊躇。

「…痛え。何で広告塔がこんなに…」

それにより違和感を見つけてしまう。

「あれ？ 何で俺固いって…夢、だよな？ でも痛み…現実？ ありえ
ない。」

なら夢…でも…現実…夢…現実…グウウアア…！」

……イイイ

「頭が 割れる…」

……イイイイ

「耳鳴り？…こんな時に」

……キイイイイ

「…外から聞こえるって事は耳鳴りじゃないのか？」

思わず立ち上がり周りを見渡す。

「何だこれどつから…あつちか

その顔に引け付けられるよつよつと歩き出す。

「向こうは確か…操縦席？いや逆だから一列車かない。

先程から続く頭痛に思考を遮られながらも向知ははまだ歩みを止めない。

どのくらい歩いただろ？距離にすればほんの数メートルだろうが連結部にたどり付いた時、何十キロも歩いたような感覚に教わっていた。

「…クソッ。何で開かないんだよ！」

必死にノブに力を込めるが扉は動く気配が無い。

「…どうかにバールみたいなのが…」

扉を開ける事を諦め、ガラスを破壊するため緊急用のハンマーを使おうとするが…

「やうだ、逆さまじや見つけても取り出せな…逆さまっ！」

何かを思い付いたのか再び扉の前に立ちノブに手を掛け…

右上に引き上げた後思い切り引き寄せた。

「…上下逆だつて事忘れてた」

田の前の扉が開いた事により安堵感と羞恥心が疲れと共に一気にの
しかかってくる。

「なんか無駄に疲れた……ま、いいや先進も」

多少の疲れを引寄せながらも「号車のドアに手を掛ける。

「わざと開けて…帰る…」

掛け声と共に力を込めるが扉はびくともしない。

「堅つてええ… どんだけだよ…」

動かぬ扉を前に一度体勢を立て直そうとした時に悲劇が襲つ。

「…?」

今彼が居るのは鉄が剥き出しになつてゐる車両同士の接合面であり
ただでさえ滑りやすいのだがそれに加え朝靄のおかげで余計に滑り
やすくなつてゐるのである。

そんな状態で足の力を抜くとどうなるか…

そう

「ガゴゴーアンッ…」

盛大にすつ転ぶのである。

「むふひはほへふお…!!」

「痛つつつ……全く酷い田に……ん？」

床（天井）にへばり付くような格好のまま扉に近づく。

「んだこれ？隙間になんか刺さってんな……針金か？」

伏せたままそれを抜き取る。

「針金にしちゃ固つてーな……もしや、扉がすぐに開かなかつたのこれの所為か！？」

伏せた体勢から起き上がる。（起き上がる途中でもつ一度滑る）

「……幸運の女神とやらは俺が大嫌いみたいだな

最も、神の存在自体あやふやなのだが……

「……わい、わつきから聞こえる音は……何だうねつー。」

鈍い音を響かせながら扉はゆっくりと開いていった。

一 呼車

中にはこれと書かれて変わった特徴は無かつた。

一 呼車と同じく上下逆の車内。先程よりも大きな音で響く音。

「…パソコンだよな？…どうみても」

そして田の前に浮かぶ一丘の丘。

「とりあえず…何でパソコンが浮いてんのか？は置いとくとして…あの音の出所で良いのか？」

車内は未だ奇妙な音が響いている。

「音つてこうと…内部のファン…しか無いよな？…どう止めるんだ？」

音を止めるべくパソコンに触れた瞬間脳内に無機質な声が響く。

…メザメノ ジカンダ…

「……えつ？」

視界が碎け、意識が闇に引き込まれた…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1652o/>

Your memory 無機と有機の狭間で

2010年10月9日10時09分発行